

秋田県の幼稚園創設期におけるキリスト教会の役割

— 初期幼稚園にみる貴族性と養護性を中心に —

奥山 順子

The Christian churches' role in the early period of founding kindergartens:

— Focus on two aspects of aristocracy and care —

Junko Okuyama

There were two definite aspects in the role of Japanese kindergartens in their founding period. The first one is the aristocracy in kindergarten education which aimed to nurture young children of the upper class families. The other aspect reflected their role of social welfare and care. The purpose of this paper is to reveal the relationship between the two and to show how they came to fuse. In order to achieve this goal, the present study investigated the kindergarten activities conducted by Christian churches and convents in Akita Prefecture in the period from the Meiji era to the prewar Showa era.

The Christian kindergartens and other ordinary kindergartens had already cooperated with each other in Akita Prefecture because the number of kindergartens was limited. Since Christian churches conducted management of kindergartens and welfare activities at the same time, they made use of those welfare activities and utilized the relevant network of the day nurseries in their teacher training. That was one of the main factors that played a role in the fusion of two aspects of education and care in their activities in kindergartens.

Key words : Kindergarten, Christian church, Aristocracy, Care, Akita Prefecture

はじめに

日本の幼稚園教育は、確立した制度に基づく初の幼稚園開設である官立の東京女子師範学校附属幼稚園（1976年開園）をもって始まったとされるが、日本での幼児あるいは乳幼児を対象とした教育・保育の歴史には、幼稚園以外にもいくつかの系譜がみられる。

明治から大正期に見られる多様な目的による幼児教育機関（施設）としては、第一に、上記附属幼稚園のように、制度としての枠組みの中で計画されていった幼児教育・保育施設がある。第二は、小学校教育の先取的教育をめざす幼児教育施設や教育活動¹⁾であり、この中には幼稚園の一部も含まれる。これらは、上流階級・知識階級という一部階層の要求に応じたものである。第三には、地域の育児を担う互助的活動がある。農繁期託児所²⁾に代表されるように、地域内で保育に欠ける乳幼児を保育する互助的活動である。その中には、子守小学のように、主目的である小学校就学率の向上のための手段としての保育も含めることができる。第四は貧困家庭、孤

児など救済を要する状況に対して生まれた養護的保育活動である。篤志家によるものや後述のキリスト教伝道活動、信仰生活の一部として行われた慈善事業、救済事業などがこれにあたる。

以上、主たる系譜を四つに分類したがこのうち、前二者を「教育」、後者を「養護」「福祉」と考えられることがある。実際、初期の幼稚園は特権的教育の場ともいえる性格を有し、後者で第一に求められた養護を必要とする家庭の子どもは事実上入園することすらできないものであった。しかし、本来、乳幼児の教育・保育を考えるとき、教育という側面と養護的側面とは分離できるものではない。上記のような系譜をもつ日本の幼児教育の中で、現在考えられている幼児教育、すなわち「保育 (Early Childhood Care and Education)」という独自性は、いかにして理解され具現化されていったのであろうか。

本稿では、明治から昭和戦前期の秋田県における初期幼稚園において、特に創始期の日本の幼児教育に大きな

役割を果たしたキリスト教会や修道会設立による幼稚園の活動に焦点を当て、幼稚園の中で一部富裕層、上流階級の子どもを対象とした特権的性格（貴族性）と、福祉・養護的側面（養護性）とがどのようにかわりあっていたのかについて検証する。

1. 日本の幼稚園教育に見られる貴族性

前述のように日本の幼稚園教育の始まりは、東京女子師範学校附属幼稚園の設立によるとされる。日本における幼稚園教育あるいは乳幼児を対象とする保育は多様な目的で行われており、保育もその対象もそれぞれ異なるが、東京女子師範学校附属幼稚園は国の制度に対応した幼稚園教育として以後に設立される幼稚園のモデルとなっていくたこと、同幼稚園が一時期保姆養成施設の機能も有した³⁾ こと、また全国的な保姆研修組織⁴⁾ の中心となり、指導的立場にあったことなどから、その後の日本の幼稚園教育に大きな影響を与えている。

ここでは初期の同幼稚園において、貴族性すなわち一部特権的教育の性格と保育の養護的側面とがどのように位置づけられ、具現化されていたのかを簡単に検証したい。なぜなら、同園設立から秋田県の幼稚園教育開始までにはおよそ30年の経過があるものの、同園の開設期には、秋田県の初期キリスト教幼稚園と同様にアメリカの幼稚園運動⁵⁾ の影響を受けた保育を行っていたと見られるからである。また、後発の多くの幼稚園において幼稚園設置者や保姆にとってのモデルとなっただけでなく、社会一般の「幼稚園」に対する認識にも少なからぬ影響を与えてきたと考えられる同園は、本稿のテーマである幼稚園教育の貴族性と養護性という点では、附属幼稚園では初期からその方向性に揺らぎがみられるからである。

東京女子師範学校附属幼稚園の保育は、1877（明治10）年制定の同幼稚園規則によると、幼児期ならではの発達に即した教育をめざすとしながらも、3つの保育科目⁶⁾ が設定され、教科指導的、教授形態による指導主体の主知主義的内容が主流を占めるなど、小学校教育に近い形で行われていた。また、入園者は一部富裕層、知識階級の家庭の幼児に偏り、一般市民の生活とはかけ離れたものであった⁷⁾。小学校就学率もまだ低かった時代に、高額な保育料⁸⁾ を払って一般にまだ浸透していない幼児教育を受ける者が一部の特別な階層に偏っていたことは当然の結果である。

同園の幼稚園教育は、アメリカを通して紹介されたフレーベル主義の幼稚園教育の模倣・導入によって開始された⁹⁾。このアメリカにおけるフレーベル主義幼稚園の多くは、恩物を使用する教条主義的な保育内容が主流であったこと、中にはドイツ語によってフレーベル保育を

伝えようとする幼稚園もあり、一般庶民の教育要求からはかけ離れた一部階層のものであった。つまり、日本の幼稚園は導入された時点ですでに富裕層対象の貴族的幼稚園をモデルとして開始されたのである。

ところがその一方で、同幼稚園規則では、貧困層を対象とする保育料免除の規定¹⁰⁾ も定められている。申し出があれば「事実ヲ尋問シテ後コレヲ許可スルコトアルヘシ」というものである。その一方で保育についての規定では保育時間は「一日四時間」、日曜・祭日、および夏季・冬季の長期休業も定められ、両親とも労働に従事する家庭の子どもには、園設置の地域と通園の事情も含めて事実上不可能なことであったであろう。

この富裕層を中心とする特権的教育に対して、文部省は1880（明治13）年の「貧民、力役者等の幼児を保育するために簡易編成の幼稚園設置の必要について」とする示諭¹¹⁾ により幼稚園の入園者層の拡大を図る動きを見せている。その一方で1880（明治13）年から1886（明治19）年まで、附属幼稚園最上級と附属小学校最下級とを一緒にまとめる連結級（コネクティング・クラス）を開設¹²⁾ して、連結級在籍を小学校第一学年と認める、事実上の5歳児入学または一学年の飛び級というシステムを作成、実行している。小学校就学率が低い時代にあつて、これは幼稚園に一層特権的な性格を持たせるものであったといえよう。

さて、附属幼稚園の性格を富裕層を中心とする貴族性へと傾斜させたのは、幼稚園において、「下層階級の幼児を保育¹³⁾」することを目的とする1892（明治25）年の附属幼稚園分室の開設である。分室では保育料未徴収を謳い、後に国によって設置が奨励される簡易幼稚園¹⁴⁾ のモデルとされた。しかし分室は、実際にはその目的を実現するものとはなっていない。分室の保育時間は週28時間とされ、従来の規定からはわずかに週2時間の延長しかなされておらず、貧困層への具体的対応がなされたとはいえない。このように「分室」は貧民層へも幼稚園教育を開かれたものとするのを目的とするのではなく、貧民層対象に貴族的幼稚園とは別枠の幼児保育を提供しようとするものであった。小学校との連結級という特権層の差別化における結果的な失敗に続いて、貧民層対象の幼児教育の差別化を図ろうとする動きであったともとらえられる。

さらに分室に関して、附属幼稚園側は文部省に対し、保育料徴収も要望¹⁵⁾ している。それは、分室には「貧民幼稚園」より「普通簡易幼稚園」としてその後の幼稚園教育の普及の役割を果たすための性格を持たせるべきであるとする考えによるものである¹⁶⁾。つまり、貧民層に対する託児、養護といった福祉的機能よりも、内容をやや簡易にはするものの、附属幼稚園がそれまで行って

きた幼稚園教育,すなわちフレーベル主義を基本とする,設定された保育項目にそった保姆主導による教育の普及を目指したとも考えられるのである。

これに関しては,小学校教育の普及においても未だ貧困層への配慮がなされていない時代に,幼稚園教育での「分室」あるいは「簡易幼稚園」といったシステムの導入が早急であるとの考えもあった。結局,分室は1912(明治45)年には,保育料の徴収を決定している。こうして,附属幼稚園に対しては,文部省内側から,対象が富裕層に偏った実情への改善が求められていたが,附属幼稚園側はあくまでも幼稚園教育の今後の普及発展のために研究提示をする先進幼稚園としての役割を第一義的に求め,それが幼稚園の「貴族性」を一層色濃くする結果となったと考えられよう。

さて,こうした幼稚園の動向とは異なる系譜が日本の幼児教育には見られる。東京女子師範学校附属幼稚園設立以前の1871(明治4)年に,横浜に混血孤児救済を目的とした「垂米利加婦人教授所」が開設されている。これはアメリカからキリスト教伝道を目的として来日した女性伝道師による活動である。このアメリカ人女性によって,後に附属幼稚園の保育の基本となるアメリカでのフレーベルの保育に関する資料が提供され,翻訳された¹⁷⁾といわれる。後に貴族的幼稚園における主知主義的教育の方向を示すことになった資料を提供した女性たちが,自らは幼稚園とは目的を異にした慈善的,救済的活動に献身していたことは興味深い。

以上のように,日本の幼稚園教育の先行例として各地の幼児教育のモデルともなっていた東京女子師範学校附属幼稚園では,実際に幼稚園教育が一般庶民に幼稚園教育へのニーズが低い時代であったことにもより,文部省が示す,家庭保育が不十分な貧民層の幼児への保育は現実的課題とはならず,結果的には実際の入園者層である富裕層・知識階級から支持されることとなる,特権的教育を進めることとなっていたのである。

その一方では,垂米利加婦人教授所に見られるように,いかなる困難も神の意思として受け入れるというキリスト教の回心としての慈善,救済活動における幼児保育・養護的保育という方向もみられた。その多くは幼稚園以外の施設で見られた傾向ではあるが,以後の幼稚園教育の中で,東京女子師範学校附属幼稚園に見られた貴族的幼児教育が,本来幼児に必要とされる養護性を,どのように受け入れ,「保育」を構築していったのであろうか。次に秋田県の初期幼稚園とキリスト教との関係を中心として検証する。

2. 秋田県における幼稚園教育の開始とキリスト教

秋田県の幼稚園教育の開始は,東京女子師範学校附属

幼稚園開設から29年後のことである。幼稚園開設が遅かった他地域同様に,その門戸をひらいたのはキリスト教の伝道活動であった。ここでは,初期開設幼稚園のうち,キリスト教会および修道会による幼稚園についてその開設経緯および初期活動の特色を概観する。

1) 保戸野幼稚園¹⁸⁾

秋田市に教会(聖救主教会)を設立して伝道活動を行っていた日本聖公会によって,1905(明治38)年に開設された保戸野幼稚園が,秋田県内初の幼稚園である。日本聖公会は,イギリス聖公会(英国国教会)の流れをくむアメリカ聖公会からの来日伝道である。アメリカにおいて聖公会は,教育に力を注ぎ,幼稚園や保育者養成の活動に着手していた¹⁹⁾。

前述のように明治後期はアメリカの幼稚園普及運動期にあたり,その中心がドイツから移入されたフレーベルの恩物使用による教条主義的,主知主義的幼児教育である。これは一部富裕階層,知識階級で受け入れられていた。アメリカ聖公会の信徒には富裕層の者が多く²⁰⁾,聖公会による幼児教育もまた,会派の信徒層,またアメリカの幼児教育運動同様に,上流家庭の子どもを対象とした教育であった。

保戸野幼稚園は開設当初の記録が残されていないが,大正初期の記事による保育場面の紹介記事²¹⁾によると,幼児には難しい観念的な説話や英語の教育などが行われている。日本人女性伝道師が幼稚園を手伝っていたとされるが,中心はアメリカ人女性伝道師であり,宗教的儀式を大切にする聖公会の会派としての特色も考えると,一斉指導による説話,会集,唱歌を保育の中心とする保育がなされていたと考えられる。

さて,保戸野幼稚園は,その前年開設の「幼児遊戯場」と称する活動がその土台となっている。聖救主教会では他教会同様に日曜学校や,女性対象の料理や刺繍などの教室を行っている。当然教会には家族と共に乳幼児も訪れ,その乳幼児への保育の必要性もまた伝道活動の一環としての「幼児遊技場」誕生,その後の幼稚園活動への展開の背景として考えられよう。

2) 秋田幼稚園

保戸野幼稚園と同じく1906(明治39)年,秋田県内最古のプロテスタント教会が秋田幼稚園を設置している。1884(明治17)年に秋田で伝道活動を開始した米国基督教会(ディサイプルス)派による日本で最初の教会(1889年設立,秋田基督教会²²⁾)による設立である。同教会は1885年頃には英語教育を目的とした秋田英和学校を設立し秋田における外国人宣教師の安定的な活動の保障を図る²³⁾など,当初から地元への定着に力を注いでいた。

1895(明治28)年着任の宣教師の夫人は医師であり,

秋田における伝道は医療関係の活動を中心として行っていた²⁴⁾。定期的な診療所の開設、地域での保健指導のほか、医学・看護をめざす日本人女性の指導や留学支援なども行っている。しかし、1902（明治35）年に外国の資格による医療行為が禁止されたことにより、その活動は転換せざるを得なくなっている。医療・保健に関連する活動は専ら日本人助手によって行われるようになる。夫人の活動はそれら日本人助手の指導に加えて、女性対象の料理、裁縫などの教室、母の会活動の指導などとなっていくが、幼稚園の開設もまたこうした流れの中で実現している。

この秋田基督教会の伝道活動の中心は聖書の普及・販売である。信徒は、当時の日本におけるキリスト教信者一般の傾向同様に聖書という書物を媒介とした学習が可能な知識階級の者が多く、英語学習を目標とした師範学校生徒も多く出入りしていたと記録されている²⁵⁾。

一方、幼稚園開設前から行っている母の会活動は、幼稚園と密接なかかわりを持っていた。母子の関係がフレール主義の幼稚園教育で重視されていたこともあり、幼稚園の運営には母の会もかかわっている。初期の母の会代表を務めた女性²⁶⁾は、福祉活動（廃娼運動、禁酒運動、託児運動など）のリーダーとして幅広く活躍し、幼稚園ともかかわりが深いのがこれについては後述する。秋田幼稚園の特色は、幼稚園開設まで20年以上の秋田市での教会活動の中で、母の会などの女性対象の諸活動の定着が図られ、その基盤の上に幼稚園が開設されたこと、そしてこれらの中で行われていた福祉活動と幼稚園事業とがかかわりを持ちながら活動を展開していった点にある。

3) 榎山幼稚園²⁷⁾

上記2園に続く1908（明治41）年の榎山幼稚園の設立はカトリックのドイツ系修道会・聖霊会によるものである。聖霊会は幼稚園のほか孤児院や職業学校も開設している。孤児院の幼児は幼稚園に入園し、孤児院を出た後に社会人として自立できる人間の育成がこの修道会の活動の大切な目標とされている。先の2園が富裕層、知識階級の子弟を中心として保育を行っていたのに対し、榎山幼稚園は当初から保育に養護・福祉的な目的も持っていたとみることができる²⁸⁾。

ドイツ系修道会による秋田での活動には当初から困難が伴い、特に第一次大戦開戦後は激しい弾圧にあっている。同学園の記録によれば1918年から1925年まで「園舎手狭なため」活動を一時休止した²⁹⁾とされているが、この時期、ドイツ人修道女が地元の子どもたちを対象に保育活動を展開する困難も、幼稚園休止には少なからぬ影響を与えていたと考えられる。

それに加えて、後述のようにこの活動休止中の1920

年、聖霊会の修道女であった聖園テレジアが日本人の修道院、聖心愛子会を設立し、聖霊会から他の修道女もその活動に賛同し、参加している³⁰⁾。榎山幼稚園の休止への影響が大きいことはうかがわれるが、それに関しては記録されていない。幼稚園が福祉事業との関連で設立されていたこと、この修道会の当初からの福祉的活動への強い関心もうかがうことができる。

1918年、秋田市内の3幼稚園が保姆研修会「秋田連合保育会」を設立しているが、榎山幼稚園は1924年から、すなわち幼稚園休止中に会員として参加³¹⁾し、この保姆研修の講師も担当している。同園が幼稚園の活動を継続させる意志を持ちながら、困難な時代も地元での活動を続けていたことがわかる。

以上が秋田県の早期開設幼稚園3園である。その後、秋田県女子師範学校附属幼稚園や、子守学校的性格を有する篤志家による私立幼稚園³²⁾が設立されている。しかし、秋田県における幼稚園教育に対するキリスト教の位置づけ、その果たした役割を考える上で重要な存在となるのは、次に述べる聖園テレジアによる幼稚園も含めた福祉・慈善の諸活動である。

4) 聖心愛子会の諸活動

ドイツ人修道女、聖園テレジア³³⁾が秋田市に邦人修道院である聖心愛子会を設立したのは、秋田県における幼稚園教育開始から15年後の1920（大正9）年である。テレジアは1913（大正2）年に聖霊会に入り、秋田で前記の榎山幼稚園・同孤児院の活動にかかわっている。聖心愛子会の設立には日本人7名のほかドイツ人修道女3名がかかわっているが、内2名は聖霊会から離れての参加によるものである。

聖心愛子会は1920年に活動拠点が決まるとすぐに、日曜学校、託児所、巡回看護事業を開始し、養老院を開設している。1922（大正11）年には母の会設立、医院の新設、1924（大正13）年には児童養護施設など次々に事業を開始し、その後、幼稚園、失業救済事業、子ども向け新聞の発行、母親の意識向上を企図した雑誌の発行と幅広い活動を展開している。

当時の秋田市における活動は困窮を極め、修道女たちは貧困の中でこれら多くの活動を展開していった。秋田における活動開始直後には、財政的にも人的にも厳しい状況下での数多くの活動展開を無謀であるとして、ローマ教皇の使者が活動中止を意図して聖園テレジアを訪問したとの記録³⁴⁾がある。前述の聖霊会・榎山幼稚園休止の事情同様の厳しさが、ドイツ人修道女である聖園テレジアの活動にも大きな困難をもたらしたであろうが、邦人修道会として設立したことが聖霊会に比べて活動展開の基盤づくりにより多くの可能性をもたらしたであらう

うと考えられる。活動中止の勧告には従わず、聖心愛子会は幅広く活動を展開し、その後県内各機関との連携も進めていくこととなった。

幼稚園に関しては、市内幼稚園保姆の研修会記録³⁵⁾によれば、幼稚園開設以前から研修会への参加をしている。これには、先の聖霊会による楢山幼稚園や孤児院で活動経験のある修道女が聖園の修道院に移ったことと関連していると推察される。聖園テレジアによる聖心愛子会では、幅広い慈善事業、福祉事業の延長線上に幼稚園開設があった。幼稚園以外の聖心愛子会による活動が、社会的弱者の救済に向けられていたこと、幼稚園以外にも託児施設や養護施設、また母子支援施設も設立していたことを考えると、富裕層を主な対象とする幼稚園は、異質の活動のようにも考えられる。しかし、当時のカトリック修道会による活動では、幼稚園と隣保事業やセツルメントによる保育とが一体化している場合も少なくなく³⁶⁾、必ずしも幼稚園が富裕層の子どものものであったとは限らない。しかし、その一方では日本人修道女をはじめ、当時のキリスト教信者全体に上流階級、知識階級が多かったこと、一般に修道会の活動を広げるためには、社会的弱者のみならず、その活動を支える基盤作り、特に経済基盤の確立と伝道の拡張のためには、活動を富裕層に拡大する必要が大きかったのであろう。

3. キリスト教会の活動と幼稚園教育・養護・託児

次に、これまでその設立の経緯について述べてきた、初期設立幼稚園にかかわったキリスト教会および修道会の諸活動と、幼稚園教育・保育との関連を考察する。このうち、当時の記録が稀少であるため、聖公会による当時の幼稚園以外の活動に関しては、母の会や日曜学校の実施を知ることができるのみである。また、楢山幼稚園に関しては、前述のように聖霊会から離れて聖園テレジアと行動を共にした複数の修道女の存在が会の活動に与えた影響が少なくないことから、ここでは秋田幼稚園と聖心愛子会に関連する養護・福祉の活動を中心に述べていくこととする。

秋田幼稚園を設立したキリスト教会派ディサイプルスは、幼稚園設立前に約20年間、秋田県において伝道活動を行っているが、その中では女性宣教師および宣教師夫人によって女性や子どもを対象とする多様な事業が展開されている。これは夫婦伝道を基本とするプロテスタント会派の伝道の特徴でもある。国家主義の台頭によって活動困難を強いられた教団は、大日本帝国憲法の発布(1889年)後、地方における外国人宣教師による伝道を一時中断しているが、1895(明治28)年に再び外国人宣教師を秋田に配置³⁷⁾した。そこで来県したのが後に秋田幼稚園を開設する宣教師スチーブンス夫妻であっ

た。婦人は前述の医師としての活動に加え、女性対象のいくつかの教室を開設した。

婦人によって開設された医療所は1898(明治31)年の本部への報告書³⁸⁾によれば、8ヶ月間の患者数が1,715名とされている。彼女たちの地域における伝道活動の課題は、第一に人々の生活改善であり、衛生、医療・保健、栄養などといったことである。これは当時の秋田における宣教師たち自身の生活においても改善を必要とする看過できない問題でもあったろう。第二には、この教会が秋田市で活動する基盤作りの段階からの課題であった子ども達の不道德と栄養や衛生状況の悪さである³⁹⁾。これらに対して、スチーブンス夫人は、医師としての指導、援助を行っている。この指導は、子どもの心に宿る神性を思慕し、子どもを神の子として教育し、教育して神の子とすることが母親の生涯の任務であり最高の歓喜であるとするキリスト教に基づいたフレーベルの思想による幼稚園教育や母の会活動にもつながるものである。

一方、日本人婦人伝道師の活動は、1900(明治33)年の報告によれば、「三つの日曜学校、週一回の婦人会、月一回の婦人矯風会の活動」⁴⁰⁾とある。この報告中の婦人矯風会については、組織母体が不明であるが、この時期教会では後に秋田の矯風会事業や婦人運動の中心的存在となる和崎ハル⁴¹⁾が活動しており、秋田教会がその後の婦人運動、特に廃娼運動などを中心とする矯風会活動のひとつの拠点となっていく。1903(明治36)年には、スチーブンス夫人らによって新たに会員20名による「婦人矯風会」が組織された。

幼稚園開設後も教会は福祉活動を継続し、1913(大正2)年からは私設の慈善学校である福田学校の児童を幼稚園行事に招待し、幼児との交流を行っている。例えば幼児がもらったクリスマスプレゼントのすべてを福田学校生徒にプレゼントさせるというような内容で、幼児に慈善の精神、犠牲的精神を学ばせることを目的とする保育内容としての事業⁴²⁾である。つまりこの場合は、教育と養護の一体化ではなく、貴族的幼稚園教育の保育内容としての慈善であり、福祉活動なのである。

また、教会は幼稚園開設前から母の会活動を行っているが、秋田幼稚園でもまた開設当初から幼稚園としての母の会活動を行っている。昭和初頭の母の会会長・早川かいは、矯風会の秋田支部長でもあった。1928(昭和3)年、秋田遊郭の火災をきっかけとして誕生した「廓清会」の活動、廃娼運動の過程では、娼妓たちの更正施設「秋田婦人ホーム」を創設した。このとき早川は幼稚園母の会会長を辞し、婦人ホーム収容の女性たちの子どもを対象として、託児所を開設した⁴³⁾。すなわち、幼稚園とは異なる保育施設である。しかしながらこの託児所保姆

は後述の秋田幼稚園が設立にかかわった幼稚園保姆研修には早期から参加している。

さて、大正期以降、秋田県における幼児保育を含む福祉活動における聖心愛子会の活動は、その事業展開の幅や、短期間での実現において目を眩るものがある。聖園テレジアは聖霊会から独立した1920（大正9）年から3年間のうちに修道会の設立、幼稚園・託児所の設立と日曜学校の開設をしている。その後、母の会の設立、そこを拠点とする生活改善のための内職奨励会を開始し、これには市役所の後援も受けて事業を継続させている。1931（昭和6）年までには、保育所、養護施設、託児所、サナトリウムを開設、託児所・幼稚園の母の会、それを園児の母親以外にも開放した活動、そしてその後には保姆養成所も開設している。そればかりか秋田を拠点として全国に4箇所の修道会支部をつくって活動を広げている。

1927（昭和2）年から、国は婦人方面委員⁴⁴⁾の配置が奨励したが、聖園テレジアが翌1928年に秋田市から婦人方面委員の委嘱を受けている。第一次大戦下の社会、国家主義の台頭、外国人の排斥、キリスト教弾圧という秋田県の状態においても、活動自体の必要性が多くの人々の認めるものであったこと、カトリック修道女たちの、困難を神の意思として受け入れ、神に服従することを社会化のプロセスと理解する社会的行動規範が、具体的な事業を通して地域から受け入れられたものと考えられる。

この聖園テレジアの諸活動は、徹底して貧民や孤児、病気に苦しむ人々といった弱者救済に向かっていたのに対し、ただ一箇所の幼稚園は他事業とは明らかに性格を異にする。これには、活動資金の確保という問題が関係していたものと考えられる。修道会の活動初期にはアメリカ人、ドイツ人篤志家からの援助を得ていたが、以後の活動継続については、日本人の援助なくしては実現しない。聖心愛子会の事業のうち、富裕層との直接の接点があるのは幼稚園のみであり、富裕層・知識階級とのつながりこそ、伝道を通じた経済基盤のみならずキリスト教修道会の安定的活動の保障には必要条件の一つであったといえよう。この基盤の上に立った慈善救済活動の継続には、当然幅広い階層との接点、行政との接点が重要であり、それが実現していたからこそ、上記のような活動展開が可能であったとみることができる。このように聖園テレジアの活動は、秋田県内の福祉活動の中心的位置づけがなされるようになり、県内各地域の福祉活動のモデルともなっていく。

秋田幼稚園を拠点とする婦人運動と聖心愛子会による福祉事業について概観してきたが、ではこれら福祉活動が幼稚園教育とはどのような関連を持ち、幼児保育にど

のような影響があったのであろうか。秋田幼稚園に見られるように、教会と幼稚園はそれぞれ福祉の活動にもかかわっているが、それはあくまでも教会・幼稚園といういわば当時の社会においては一部の上流階層の活動という、いわば貴族性に支えられた活動という意味合いを持っているのか。

その一方、聖園テレジアによる活動は福祉・救済を必要とする状況に自ら身を投じて「回心」することを目的とする活動であり、その事業が地域の必要性と合致していたことを考えると、秋田幼稚園・秋田基督教会の福祉活動とはその意味に若干の違いがある。しかし、聖心愛子会による幼児保育をみても、幼稚園以外に複数の託児所・保育所を設立し、養護的保育を実現させている。つまり幼稚園はそれらとは目的を異にする施設と考えられていたととらえられるのである。

これまで、幼稚園教育および同時に行った福祉活動における「貴族性」と「養護性」について、早期設立の秋田県内キリスト教幼稚園に関して述べてきた。次に秋田県内幼稚園における「貴族性」「養護性」の関係を、保姆たちの研修会において検証したい。

4. 保姆研修におけるキリスト教会の役割

秋田県の幼稚園教育は全国でもその設立が遅かったため、設立の時期にはすでに全国規模、また各地域に保姆研修会、幼稚園連合が組織⁴⁵⁾されていた。秋田県内でも幼稚園教育開始の数年後にはわずか3園によって秋田連合保育会（後に秋田市保育会と改称）が結成されている⁴⁶⁾。これは先行例に倣った形式のものである。この秋田連合保育会は後に全県の幼稚園、託児所など保育関連施設による秋田県幼稚園連合保育会へと発展している。また、県内幼児教育に先駆的役割を果たしたキリスト教幼稚園に関しては、県内初の幼稚園が設立されたのと同じく1905（明治38）年には全国のキリスト教保育連盟が組織されており、秋田県の幼稚園組織は、当初から地域内だけでなく全国的なネットワークの中に置かれていたとみることができる。

創始期の幼稚園では保姆資格を有する保育者を確保することは極めて困難であった。その理由として、第一に保育者養成施設の未整備、第二に保育または保姆資格への認識の低さ、第三に女子教育への無理解が挙げられる。幼稚園に関する初の単独勅令である「幼稚園令」において無資格者の保育従事が認められていた⁴⁷⁾こと、育児・保育は女性、母親の仕事と受け止められていたこともあいまって、保育者（保姆）になるための教育の必要性は重視されてはいなかった。

保姆養成や保姆研修は未整備の時代であったが、楯山幼稚園では設立時から当時数少なかった保姆養成所卒業

の日本人修道女を保姆として迎えている⁴⁸⁾。また保戸野幼稚園、秋田幼稚園でも保姆養成所出身者を早期から幼稚園保姆としている⁴⁹⁾。保姆養成所については、幼稚園同様、国や自治体による整備がなされず、多くがキリスト教による施設である。また、保戸野幼稚園、秋田幼稚園は他県の教会や幼稚園との人事を含めた交流があり、独自のネットワークも持っていた。全国的組織であるキリスト教保育連盟によって、秋田県と青森県の幼稚園による合同研修会も行われている。

そうした中で、秋田県内では二つの保育会がそれぞれ1918（大正7）年、1929（昭和4）年に設立され、1944（昭和19）年まで活動を継続している。秋田県の保姆研修会においては、指導的立場、主導的立場となっていたのは、秋田県女子師範学校附属幼稚園である。同園は師範学校卒業者のうちの成績優秀者や、小学校教員経験者を保姆としており、幼稚園主事ならびに師範学校長とともに研修会では中心的立場となっている。文部省からの情報の収集や、他園への情報提供、啓蒙・指導という面では力を発揮しているが、幼児教育、保育の独自性という面ではこの附属幼稚園保姆たちにとっても保育会で他園の保姆との交流研修の機会は、数少ない幼児教育の学習の場であったに違いない。

県内の保姆研修は、当初は理論や運営面の協議などが中心であったが、次第に保姆たちの研修要求に応じて、実技研修を中心とした保育内容研修が中心となっていった。この研修は当番園保姆が担当し、毎回2～3の遊戯を紹介するものである。保育会は輪番で行うことが決定されているが、実技研修担当園には明らかな偏りがあり、遊戯講習を最も多く担当していたのは秋田幼稚園である。同園は初期から東京、神戸、仙台の保姆養成所出身者を保姆としていること、教会を通じた他県の幼稚園との交流があったことなど、他園に比べて実践的な研修機会あるいは情報に触れる機会に恵まれていたとみることができる⁵⁰⁾。また、活動を一時中止していた楯山幼稚園も保育会に参加し、こうした実技講習を担当している。養成教育が不十分な時代に、保育会の活動は、養成段階の学びやそれ以降の研修を伝達する機会として実践現場の保姆たちの要求に即した内容であったのであろう。しかも当時の保育の流行ともいえる遊戯講習⁵¹⁾は、研修会への参加や見習的な学びでしか獲得することのできない実技の学習機会である。当時の保姆にとって自身の生育過程でも体験のないことでありながら、保育の主要な項目であったことを考えれば、この講習に保姆の期待がより高かったこと、そこで講師なった保姆たちの役割の大きさは容易に推察することができる。

保姆研修会の活動は、社会情勢が厳しくなった昭和戦前期までも継続実施⁵²⁾されている。県内の認可幼稚園

数は1931（昭和6）年までわずか7園に過ぎなかったが、1928（昭和3）年以降、保育会にはこの幼稚園数以上の参加が記録されている。1924年には、前記の聖心愛子会による幼稚園の前身である聖心園の参加を得ているほか、託児所や秋田幼稚園母の会から廃娼運動の一環として設立した秋田婦人ホームとその託児所もまた客員として保育会には参加している。そのほか、秋田市外の託児所の参加も見られ、1933（昭和8）年には、保育会として特に長期託児所に対する参加の勧誘を行っている。

このように、幼稚園保姆の研修組織には、幼稚園を設立した教会、修道会を通して、福祉・養護を主体とする保育施設の参加も見られたのである。これによって、保姆研修には、他の流れも生まれている。第一には、県が主催する農繁期託児所等、託児所の研修会への幼稚園保姆の参加⁵³⁾である。これには、講師としての参加、情報交換会への参加があるが、ここで重要な役割を果たしたのが聖園テレジアである。保育会への参加とともに自ら養護的保育と幼稚園教育の双方の実践者として研修にかかわったことの意味は大きい。第二に、託児所との交流は、保育会への県児童家庭課の支援を実現させることとなる。県学事課は保育会への参加はしているが、補助金等一切の援助を行ってはいない。それに対して児童福祉課が厚生省関係者を講師として派遣するなど活動支援を行っている。つまり幼稚園保姆が児童家庭課・厚生省による、本来は福祉・養護を目的とする保育の指導を受ける研修機会を得ていたということである。児童家庭課・厚生省との連携は、保育会としての要請にもよるが、キリスト教幼稚園による活動が、幼稚園という枠組みに留まらず、福祉的な託児や母親支援、児童養護施設といった活動へ広がりを持っていたことが、ひとつの契機となったと考えられる。

初期開設幼稚園は先に述べたように、一部富裕層、知識階級に入園者層が偏ったものであった。しかし、そうした幼稚園の保姆たちが、託児所やその他福祉関係者との合同研修の機会に接したことは、保育の教育的側面と養護的側面の融合という、幼児教育の独自性の確立に意義を有するものであり、結果的に幼稚園の貴族性を本来幼児保育に求められる養護性へと開く意味へとつながったといえよう。

おわりに —— 幼稚園教育における養護と教育の融合

秋田県における幼稚園教育は、多様な経緯、開設の契機をもって開始されている。それに対して、聖心愛子会による託児所、早川かいによる託児所、楯山幼稚園の孤児院のような、救済、児童養護という異なる目的で設立された乳幼児保育施設も開設された。

これらの施設は、目的も対象幼児も幼稚園とは明らかに異なっている。では、秋田における幼稚園教育は、これらの託児所とは異なり、東京女子師範学校附属幼稚園に象徴されるような、初期の日本の幼稚園と同様の、養護的側面を全く有しない特権的教育であったのであろうか。前述のように幼稚園入園者層の特徴、わずかに残された保育の記録⁵⁴⁾からは、当時の社会において一般庶民の教育であったと言うことはできない。しかし、先に述べた保育会の活動、福祉協議会への参加などを通してみると、秋田県の場合、幼児教育・保育施設が少なかったことが、合同活動の成立、継続という結果を導いたと考えられる。

さらに、この合同活動に参加した幼稚園を通して、キリスト教会、修道会による多様な福祉活動に触れることは、保姆たちの専門性育成において間接的な成果ではあっても、大きな意味を持つものであったろう。母の会、養護施設、婦人ホーム、保健・医療活動などによる、幼児を取り巻く家庭や地域の環境改善は、幼児保育の重要な基盤であり、今日特に必要が強調されている保育者に求められる専門性の一つでもあるからである。こうしてみると、東京女子師範学校附属幼稚園が、福祉的な保育を廃して、幼児教育としての幼稚園の確立、普及を目指していたこと、富裕層の教育と貧民層の保育との違いを意識したことは異なる流れが秋田県の幼稚園には見られたことがわかる。

秋田県における初期の幼稚園、およびその研修活動が展開された、明治末から昭和戦前期は、キリスト教会や修道会、とりわけ外国人の活動には障害も多かった時代である。その中でキリスト教会・修道会およびその幼稚園が、県内幼稚園関係者に受け入れられ、役割を果たしていったのはどのような背景によるものであろうか。まず第一には、外国人宣教師や修道女たちによる外国からの幼児教育の情報、また日本人保姆養成所出身者による情報、またキリスト教幼稚園独自のネットワークからの情報など、草創期における貴重な情報提供者としての役割である。秋田県の幼稚園は大正末まででもわずか6園にしか過ぎない。情報交換も、研修も環境未整備の中で、外国の幼児教育や保姆養成教育の経験者の存在は設立母体の違いや保育の目的の違いを超えて意味のあるものであったと考える。

第二には、聖園テレジアの活動に見られるように、当時の秋田県の社会状況である。保健、衛生、医療、あるいは廃娯運動や孤児救済など、地域に求められた事業を進めたことに対する周囲からの理解である。前述のように聖園テレジアには市および県からの依頼や、事業の合同実施の要請もあるなど、当時の社会のニーズをとらえた活動が評価されたことであろう。

第三には、1912(明治45)年からの秋田幼稚園長グレッチェン・ガルストの存在である。ガルストは、同幼稚園を設立した秋田基督協会の初代牧師の長女で、秋田宣教時代に秋田で誕生、生活したものである。ガルストは父親の死後に帰米し、幼児教育を学び、福祉関係の仕事も経験した後、秋田での伝道に携わり園長に着任したという経歴を有する⁵⁵⁾。ガルストが園長時代の保育会記録によれば、アメリカの幼児教育事情についての講義を担当したり、矯風会など婦人運動の他機関との交流も多かった⁵⁶⁾。また、保育会はたびたび西洋風の宣教師館で行われており、保姆たちにとって異文化に触れる喜びの時間でもあった様子が見える⁵⁷⁾。

このように、聖園テレジアやグレッチェン・ガルストといった特筆すべき人材を得たことも大きな要因となり、キリスト教の幼稚園・保育は、県内幼稚園教育の門戸を開いただけでなく、草創期の教育にも重要な役割、すなわち明治以降の幼稚園教育を貴族的、特権階級教育という狭い枠組みに閉ざされたものから養護性をもつ保育への方向性を示したという意味での役割を果たしたとみることができる。

本稿では、幼稚園教育の「貴族性」と「養護性」に着目し、教育と養護の融合という幼児教育の独自性に対して秋田県内キリスト教幼稚園が果たした役割を検証してきた。詳細な活動資料がないため。保育実践の質的な検討は不可能であったが、こうした幼稚園教育における養護性が、戦後の制度改革による学校教育としての幼稚園教育の確立、児童福祉としての保育所の確立、幼児教育施設の急増、それに伴う秋田県内保育者研修会の組織の変遷によって、どのような変化を見せたのかを今後の課題としたい。

これまで述べたように秋田県の幼稚園教育は、数少ない幼稚園と託児所等保育施設とが、草創期ゆえに、また少数ゆえに合同で活動を展開し、貴族性と養護性という二方向に向かっていた当時の幼児教育に対して、結果的にとはいえ幼児教育の基本である教育と養護の融合という一つの方向を示したことになる。戦後の幼稚園増設期においては、キリスト教幼稚園が公立幼稚園の創設児の保育者研修や保育のモデルとなる例も見られるようになる⁵⁸⁾。そうした戦後の幼稚園間関係、また保育の方向性に対して、本稿で述べたキリスト教幼稚園の昭和戦前期までの活動が基盤となっているものとも考える。

註

- 1) こうした小学校の早教育としての幼児教育には明治期まだわずかに残っていた寺子屋における幼児を含む教育、学齢前の幼児の小学校入学などが含まれる。
- 2) 農繁期託児所は、地域の互助的活動として自主的に運営され

- たもの、インフォーマルな組織として地域共同体の中に存在したものがあつた。1936（昭和11）年頃からは、農材部からの将来の兵力となる「忠実な臣民」の育成を目的とした国策として、その設置が奨励されている。また、セツルメントとしての農村託児所運動も展開されている。（上笙一郎、山崎朋子『日本の幼稚園』1974年、理論社、172-190頁では、秋田県旭村農繁期保育所を例に論考されている。）
- 3) 保母養成所、見習科は幾度かの開設と閉鎖を繰り返している。1878（明治11）年に修業期間1年の保母練習科を附設、1880（明治13）年にそれを廃止し、師範学校本科課程に幼児保育法を組み入れている。1898（明治31）年には再び保母練習科を復活、1901（明治34）年に一時閉鎖、1906（明治39）年に師範学校内に保育実習科が設置されている。
 - 4) 1896（明治29）年に附属幼稚園の保母会を中心とした「フレーベル会」が組織された。同会による1901（明治34）年発行の月刊『婦人と子ども』（後の『幼児の教育』）は地方の幼稚園教育、保母研修に大きな影響力があつたと考えられる。同誌掲載には地方の保母研修会の規約や活動例が掲載されているが、後に設立された秋田県の保母研修会の規約や会次第をみると、内容が酷似しており、これらがモデルとなつていたことがうかがわれる。
 - 5) アメリカにおける幼稚園の普及、研究にはいくつかの流れがあるが、草創期の日本の幼稚園にもっとも大きな影響があつたのは、ピーボディを中心とした幼稚園運動であり、フレーベルの恩物を使用した教条主義的指導が中心となつている。これについては後に万国幼稚園連盟（I. J. K.）におけるS・ホール、J. デューイら進歩派との長期間にわたる論争が展開され、進歩派の一応の勝利となつたが、恩物の使用、フレーベル主義への傾倒はその後も根強きのこつており、特にキリスト教幼稚園において「Gabe（恩物）」がその後も重要な位置づけをされてきた。（キリスト教保育連盟百年史編集委員会『日本キリスト教保育百年史』1986年、キリスト教保育連盟、114頁、280-281頁）
 - 6) 「第一知識科、第二美麗科、第三物品科」。このうち知識科、物品科はフレーベルの恩物を用いた指導が配列されている。
 - 7) 倉橋惣三、新庄よし子『日本幼稚園史』（1956年、フレーベル館）では、当時の在園児の回想やエピソードによって、馬車での通園、園児の家庭による教職員全員を招いての晩餐会、通園のための付添い人の待遇など庶民とかけ離れた幼稚園風景が紹介されている。
 - 8) 1ヶ月25銭（同園規則による。）
 - 9) 開設時の附属幼稚園の保育は、ドイツでフレーベルの保母養成所での教育経験のある松野クララ（クララ・チーテルマン）によって指導されたが、同幼稚園規則で規定された保育内容は、アメリカで紹介されたフレーベルの解説書の翻訳を元にして作成されている。（桑田親五・訳『幼稚園』上巻、1876年・中巻、1877年・下巻、1878年、文部省）初代幼稚園主事

- の関信三の訳による『幼稚園記』全四巻は東京女子師範学校によって刊行されたが、そのうちの3巻は、アメリカ人ドゥエイ（Adolf Douai）によるフレーベルの教育解説書である。（The Kindergarten. A manual for the Introduction of Froebel's System of Primary Education into Public Schools; and for the use of Mothers and Private Teachers, 1872, New York, E. Steiger）この中では、恩物の使用法については詳述されていない。ただし、恩物の取り扱いの型として、摘美式、就学式、營生式（Beautiful, Scientific and Life Form）の三つが挙げられており、これが附属幼稚園規定にある保育科目、知識科、美麗科、物品科につながつたとされる。また、この『幼稚園記』の付録部分は、ピーボディの著作の抄訳であると考えられている。（Elizabeth P. Peabody and Mary Mann, Moral Culture of Infancy and Kindergarten Guide, 1860）『幼稚園記』はフレーベルの恩物の使用法よりも、唱歌の重要性が強調されている。その文語調翻訳による唱歌はそのまま保育に使用できるものではなく、また唱歌自体の指導が普及していなかつた時代でもあり、教材として使用法が明確に示されている恩物による保育の方が中心になっていく要因となつたと考えられる。（岡田正章監修『明治保育文献集』第二巻、別巻、1972年）
- 10) 1877（明治10）年「東京女子師範学校附属幼稚園規則」第八条「入園ノ小児ハ保育料トシテヶ月金二十五銭ヲ収ムルヘシ但シ貧困ニシテ保育料ヲ収ムル能ハサルモノハ其旨申出ツヘシ事実ヲ尋問シテ後コレヲ許可スルコトアルヘシ」（お茶の水女子大学文教育学部附属幼稚園『幼稚園百年史』1971年、国土社、22頁）
 - 11) 「幼稚園ノ目的タルヤ専ラ幼児ノ教育ヲ主トスルモノニシテ、固ヨリ都鄙ノ別ナク亦貧富ノ分ナシト雖モ、其設置方法ノ宜シキヲ得ルコトアルトキハ却テ貧民窮民ノ為ニ最モ其益アルヲ見ル。何トナレハ世ノ貧民ニシテ一家数人ノ幼児ヲ有スル者ハ常ニ家務ニ管々トシテ之ヲ養育スルノ義務ヲ尽スコト能ハサルモノ多クシテ、童ニ幼児ノ悪習ヲ醸成スルノミナラス其遊戯ノ際或ハ危険ノ虞ナキコトヲ能ハス。若シ是等ノ父母ニシテ其幼児ヲ入院セシムルコトヲ得ルトキハ、父母ハ専ラ其ノ家務ニ従事スルコトヲ得可ク、又幼児ハ其頑陋ナル保育ヲ免ルコトヲ得可キヲ以テナリ」（『文部省第八年報』1879年、28頁）
- また、1882年の学事諮問会における文部卿代理九鬼文部省輔による「文部省示諭」では官立の幼稚園に倣つたものは地方にはそぐわないこと、また「富豪ノ子ニアラサレハ之ニ入ルコト能ハサルノ感アラシム。然レトモ幼稚園ニハ又別種ノモノアリ。都鄙ヲ論セス均シク之を設置シ、貧民力役者等ノ児童ニシテ父母其養育ヲ顧ルニ暇アラサルモノ皆之ニ入ルコトヲ得ヘキモノトス」と述べられている。（文部省『幼稚園教育九十年史』629-630頁による。）
- 12) 前掲、お茶の水女子大学文教育学部附属幼稚園『幼稚園百年

- 史] 27頁。
- 13) 同上書, 36頁。
- 14) 分室に関しては, 貧民対象の無償の簡易幼稚園としての位置づけが文部省にはあった一方で, 附属幼稚園側は, あくまでも全国に普及すべき簡易幼稚園のモデルとなるべきであり, 地方における幼稚園のあり方の研究と, 地方幼稚園の保母になるための教育の場としての意義をもたせるとの考えをもち, その設置目的は一致していないとの論考もある。(湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』2001年, 風間書房, 321-329頁) それは, 分室の保育料徴収を求める附属幼稚園側とそれを拒否する文部省との意見の相違ともなって表れている。
- 15) 1912(明治45)年, 規則の改定により, 分室の保育料月額30銭とする。(前掲『幼稚園百年史』46頁)
- 16) 前掲『日本幼稚園成立史の研究』321-329頁参照
- 17) 注9)に同じ
- 18) 後に現在の聖使幼稚園と改称されている。
- 19) ニーナ・C・バンデウォーカー, 中谷彪監訳『アメリカ幼稚園発達史』1987年, 教育開発研究所, 81頁
- 20) 元田作之進『日本聖公会史』1910年, 普光社, 115頁(『近代キリスト教名著選集』第11巻, 2003年, 日本図書センター刊による)
- 21) 秋田魁新報記事「幼稚園めぐり(二) 保戸野幼稚園」1914(大正3)年2月12日
- 22) 現在の秋田高陽教会
- 23) 秋田英和学校については詳細な資料は残されていない。英語教育を目的として解説されたものであるが, 第1の目的は, 米国人宣教師の長期旅券の獲得であったと考えられている。(日本基督教団秋田高陽教会『秋田高陽教会百年史』39-40頁, 51頁)
- 24) スチーブンス夫人による明治29年の本部への報告によれば, 医療所を開設し, それが伝道のためには有効であることが記されている。(同上書, 62頁) また, 明治31年報告では, 「二人の医学生」が婦人の下で研修していること, 8ヶ月間の患者数は1,715名との記述がある。(同, 65頁)
- 25) 1902(明治35)年, 教会機関誌『聖書之道』掲載の活動報告「聖書の販売高は, スチーブンス師の調べだけでも二〇〇冊以上におよび, 師範生はおおむね聖書を所持するにいたったという。」(前掲『秋田高陽教会百年史』71頁)
- 26) 早川かい。敬虔なクリスチャンとして, 慈善・福祉活動に力を注いだ。矯風会秋田支部長を1922(大正)11年の設立時から務めている。(秋田県社会福祉協議会『秋田県社会福祉史』246頁)
- 27) 現在の聖霊女子短期大学付属幼稚園
- 28) 聖霊学園『聖霊学園六十年史』1968年, 聖霊学園, 31頁, 35頁, 51-53頁。
- 29) 同上書, 35頁
- 30) 聖園テレジア遺徳顕彰委員会『聖園テレジア追悼録』1969年, 聖園テレジア遺徳顕彰会, 395頁
- 31) 『秋田聯合保育會記録』(秋田大学教育文化学部附属幼稚園保存資料)による。
- 32) 土崎幼稚園。小学校就学率, 特に女兒の就学率の向上と商業地域の文化の向上を願う篤志家により, 女子小学校長退職者を園長に迎えて設立された。
- 33) 「聖園テレジア」は帰化名。1890年, ドイツ生まれ。1913年来日。(『聖園テレジア追悼録』395頁)
- 34) 同上書, 396頁
- 35) 前掲『秋田聯合保育會記録』
- 36) カトリックは明治初頭から福祉的な育児事業を活動の一つの柱として日本における活動を展開している。(前掲『キリスト教保育百年史』28頁, 91-103頁)
- 37) 前掲『秋田高陽教会百年史』61頁
- 38) 注24)
- 39) 前掲『秋田高陽教会百年史』50-51頁
- 40) スチーブンス師による明治32~33年度報告での, 婦人伝道師・柴田サダの活動(同上書69頁)
- 41) 婦人解放運動, 婦人参政権運動に力を注ぎ, 戦後, 第一号の女性代議士として選出されている。早川かいとともに秋田夫人ホームの設立人となった。(前掲『秋田県社会福祉史』250頁, 秋田県『秋田県婦人生活記録史・下巻』1985年秋田県婦人生活記録史刊行会, 53-55頁)
- 42) 秋田県社会事業協会『秋田縣社會時報 第三号號』(昭和8年8月20日号)8頁, 秋田県社会福祉協議会『秋田県社会福祉史』1979年, 秋田県社会福祉協議会, 45-46頁, 87頁
- 43) 前掲『秋田県社会福祉史』243-254頁
- 44) 婦人方面員は現在の民生委員。秋田県『秋田県婦人生活記録史・下巻』1985年, 秋田県婦人生活記録史刊行会, 37頁, 44頁
- 45) 注4) 1896年結成のフレイベル会とともに, 全国各地で保母研修会・保育会が結成された。フレイベル会の研修会は, 各地域の保母研修会・保育会との協力によって開催されるようになっていた。
- 46) 秋田幼稚園, 秋田県女子師範学校附属幼稚園, 土崎幼稚園の3園によって結成された。
- 47) 大正15年, 勅令第七三号「幼稚園令」第十条 特別ノ事情アルトキハ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ保母免許状ヲ有セサル女子ヲ以テ保母ニ代用スルコトヲ得」
- 48) 前掲『聖霊学園六十年史』31頁, 35頁
- 49) 保戸野幼稚園は仙台に設立された青葉女学院の卒業者を開設時の保母として迎えている。(清野しげ編『青葉女学院史』1989年, 日本聖公会東北教区, 75頁) 秋田幼稚園では, 「英和学校」, 「仙台の養成学校」の卒業生を迎えたとの記述がある。(前掲『秋田高陽教会百年史』『秋田幼稚園記録』) また, 継続して尚綱女学院, 女子聖学院, 英和女学院の出身者が幼

奥山：秋田県の幼稚園創設期におけるキリスト教会の役割

- 稚園および教会に着任している。(秋山操編『基督教会史』1973年、基督教会史刊行委員会、760-761頁)
- 50) 日本人保姆や日本人宣教師の出身校については、注49)により知ることができる。その専攻については必ずしも保育ではないが、それぞれの出身校が幼稚園を有していること、また他県の協会との異動があり、異動先に幼稚園がある場合が多いことから、実際の幼稚園教育に触れ、実践にかかわったことが推測できる。
- 51) フレーベル会や文部省主催の保姆研修においても、その内容の中心は遊戯講習、特に昭和初期は土川五郎による律動遊戯が流行している。秋田市保育会では会員の要望により、1932(昭和7)年からはその内容が毎回数種の遊戯講習へと変化している。
- 52) この会の活動終期は不明だが、最後の記録は昭和19年6月である。
- 53) 秋田県社会事業協会『秋田県社会時報 第十五号』(昭和9年6月20日)9頁。県内3箇所での農繁期託児所従事者対象の指導講習会実施の記事が掲載されている。この講習会には、農繁期託児所だけでなく、秋田幼稚園で矯風会活動を積極的に進めた和崎ハル、秋田婦人ホームの参加も見られる。また秋田県女子師範学校附属幼稚園主任保姆が、「託児所の特色」「幼稚園と託児所の違い」「託児保育について」と題する講義を行っている。
- 54) 県内幼稚園の保育の実際を知る資料はほとんど残されていない。秋田魁新報には明治末から大正初期にかけて秋田県内幼稚園の紹介、青森県や東京の幼稚園の実際を紹介する記事が掲載されている。それらによれば、特に恩物主流の教条主義的保育が行われていた形跡は少ないが、大正期の幼稚園教育に見られる、手仕事による作品を家に持ち帰る「お土産」や、会集はよくみられる。また、在園児の回想や写真からは、一般庶民の生活とは言い難い身なりの幼児、保育者の様子うかがい知ることができる。(明治43年1月17日から19日付記事「秋田と弘前の幼稚園事業 上・中・下」、明治44年1月28日、29日付記事「東京の幼稚園」、大正3年2月12～15日付記事「幼稚園めぐり(一)～(四)」)
- 55) 渡部誠一郎『米国宣教師婦人が見た一世紀前の秋田-抄訳「ローラ・ガルスト回想録」』1994年、秋田魁新報社、67頁
- 56) 同上
- 57) 『秋田県幼稚園連合保育会記録』には、宣教師館でのお茶や食事を伴う保育会の様子が記録されており、ガルストの退任時には急遽保育会としての送別会が行われたことが記録されている。「ガースト先生カラモオ別レノゴ挨拶ガアリマシタ。懇談ノ時ニ移ルモ知ラズ知ラズニ過ゴシマシテ閉会ヲ告ゲタノハ午後六時アシタガナホ別レニ心残りガアルヨウデ御座イマシタ。」(大正十二年十月一日)1918(大正7)年から離日までの期間に、ガルストはアメリカと日本の幼稚園制度を比較しての意見発表や講義など、保育会活動に時には指導者的立場で積極的にかかわっている。
- 58) 秋田幼稚園は、戦後の公立幼稚園の創立前の保姆養成のための見習い実習を受け入れている。また聖園によって保育資料が提供され、戦後の公立幼稚園で、聖歌、聖劇が保育内容として取り上げられたというエピソードもある。(五城目幼稚園創立について設立時の職員、阿部みわ氏からの聞き取り。2004年4月24日、五城目町、五城館にて。)